関西グローバルヘルスの集い

第5回 医療と宗教

~サウジアラビアとインドネシアの医療機関の視察報告より~



近畿大学国際学部国際学科 グローバル専攻4年

高校と大学で長期留学を経験。大学在学中に医療分野で 国際協力することが目標になり、国際保健を知る。母子 保健を卒業論文のテーマとして研究中。

甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 国際看護開発学教授 看護学博士 日本WHO協会理事

千葉大学看護学部卒業後、国立国際医療研究センター小児病棟 看護師を経て大学教員となる。2014年より現職。

医療における多文化共生の 現状と課題

世界でボーダーレス化が進み、日本で も訪日外国人観光客や在留外国人の数が 年々増えてきています。私たちが海外を 訪れるときと同様、彼らにも日本で不慮 の病気や事故にあってしまった場合、多 くの不安が残ります。そこには言語面は もちろん、今回テーマになっている宗教 だけではなく、文化や価値観、生活信条へ の配慮や尊重があるかという問題があり ます。話題提供では、イスラム教世界の目 指す「神学と医学の融合」について、丸先 生のサウジアラビアとインドネシアの体 験を基に、日本ではほとんど浸透してい ない、イスラム教の教えである「コーラ ン」の戒律に則る医療行為の例が紹介さ れました。西洋的身体観では、身体は社 会・文化・宗教的意味から脱文脈化した ものと考えられがちですが、イスラム教 では医療の場であっても身体は社会・文 化・宗教的な意味を持っていると考えら れており、その見方をとても興味深く感



写真① コーランを流すためのスピーカー

じました。他にも透析室にコーランが流 せるような設備(写真①)、身体が不自由 な患者がお祈りの前のお清めをそれぞれ の病室やベッドの上で行えるように考え られてあるお清めセット(写真②)など、医 療現場における患者の宗教的価値観をサ ポートできるような仕組みを紹介してい ただきました。

患者に対する病院環境だけでなく、医 療専門職・職員にも同様の配慮が欠かせ ません。例えば、祈祷に合わせた就業スケ ジュールや優秀職員へメッカ巡礼の機会 を与えるなど様々です。

また、イスラム教圏内で同じ神を信じ、 同じ啓典を信仰していたとしても、終末 期の治療方針や蘇生の可否など、地域に よって、それぞれの医療行為に多様な解 釈があり、色々な角度から医療を捉え、同 じ医療行為でもその地での文化に適合し ているのだなと感じた時間でした。

異文化を尊重するということ

ワークショップでは、イスラム教徒に ついてどのような知識や経験があるかグ



写真② ベッドで祈祷を行うためのお清めセット

ループごとに話し合ったあと、日本人が Islamophobia (イスラム恐怖症: イスラ ム教やムスリムに対する憎悪や宗教的偏 見のこと)になる可能性はあるかどうか議 論しました。ほとんどのチームで可能性 はあるとした上で、どうすれば日本でイス ラム教が快く受け入れられるかについて 意見交換を行いました。発表は「知るタイ ミングや方法が大切し、「知識が少ないか ら嫌悪感が湧く」など自分たちの知識や情 報についての意見や、そもそも「多文化の 排除はイスラム教に限らない」、「日本人 はマイノリティーに対して必要以上にな にかしないと、と考える人が多いが、そう ではなく、イスラム教を切り口に個人との 向き合い方を考えるべき」との意見があり ました。

望ましい今後の日本は?

冒頭でも記述したように、日本でも在 留外国人や外国人労働者数が増えてきて います。丸先生から日本の看護師教育で は「日本人による日本人のためだけの看 護」を教えている現状があり、多文化看護 に関するコンセンサスが未形成ではない か、というご指摘もありました。今回の関 西グローバルヘルスの集いでは、「郷にい れば郷に従え」と彼らを日本に染めるばか りではなく、個人の信じるものを尊重し、 お互いに住みやすい社会になることを願 いたくなるものでした。この集いでも、近 いうちに色々なバックグラウンドを持っ た人たちと交流できるようになるといい なと思います。